

Paul J. Griffiths 著

## RELIGIOUS READING

—The Place of Reading in The Practice of Religion

ジョアキン・モンテイロ

本書『宗教的解読—宗教的实践における解読の役割』は極めて刺激的な宗教論であり、宗教研究、もしくは仏教研究と係りのある人ならば誰にとつても必読の書として評価しても良い質のものである。けれども、著書のポール・グリッフィス氏は日本においてはまだ充分に知られていない人なので、書評そのものに入る前に著者紹介をしたほうが良いと考えられる。

グリッフィス氏は英国生まれの人であり、一九八〇年以来北米に永住している稀有な宗教哲学者である。グリッフィス氏は、現在、シカゴ大学においてカトリック系の研究を担当しているが、その研究の枠は、キリスト教神学に対する厳密で包括的な認識から梵・藏両語の原点解読に基づいた仏教研究にまで至っている。グリッフィス氏のこうした学問的関心事の広さと並べて、シカゴ大学に關係しているが故に、その宗教哲学のあり方はエリアデーから出発している、いわゆる〈シカゴ学派〉と近い性格のものであるような印象を讀者に与えられるかもしれないが、グリッフィス氏が代表するような宗教哲学のあり方は〈シカゴ学派〉のそれと正反対の性格を持つているように考え

られる。なぜならば、〈シカゴ学派〉における宗教哲学のあり方では、研究者の個別的、具体的な信仰的立場を問題にしないままに世界のすべての宗教現象を傍観的な立場から記述する姿勢が本質的に許されているからである。このような立場に対して、グリッフィス氏によって代表されている宗教哲学のあり方では、キリスト者としての明確な自己規定に基づいてその他の宗教の論理的真理主張及びそれに基づいて成立する倫理性を批判的に検討することが中心課題となっているのである。その意味ではグリッフィス氏における宗教哲学のあり方は〈シカゴ学派〉のそれと正反対のものであると結論してもよい。グリッフィス氏は資本のグローバル化時代における宗教のあり方及び諸宗教との出会いを問題にしている点において、同じような課題から出発しているジョン・ヒック氏の〈宗教多元論〉と類似しているように見受けられるかもしれないが、この見方は本質的に間違っている。今日の日本でも流行しているように見えるヒック氏のこうした〈宗教多元論〉では、ヒンズー教的な〈不二元論〉の哲学を以って世界の全ての宗教を同質化し、本質的に対立している諸宗教の論理的、倫理的な真理主張が無責任なまでに軽んじられているのである。諸宗教に対するこうした同質化作用は、また、資本のグローバル化の暴力性に対する諸宗教の批判性を弱体化させ、問題意識を本質的に鈍らせる傾向を強く持つていると私には考えられる。〈宗教多元論〉のこうした傾向に対して、グリッフィス氏における宗教哲学のあり方では、キリスト教信仰に立脚した問題提起に基づいてその他の

宗教の問題意識を鋭くすることによって資本のグローバル化の問題性に対する正しい認識のあり方をもたらす大きな可能性をもっていると考えてよい。

以上のように著者を紹介した上で、次に本書の自身を問題にしていこう。〈宗教的解読〉と〈消費的解読〉を明確に区別した上で、この二つの解読のあり方の間の関係が本質的に対立的であるとするのが本書の中心的な主張である。グリッフィス氏が明確に報告していることからすると、キリスト教と仏教の文献を宗教的に解読しようとした自らの努力によって、それまで〈消費的〉であった自らの解読のあり方とは全く異なっている〈宗教的解読〉のあり方を初めて実感できたのである。この区別は、資本のグローバル化時代がもたらすすべての価値観の消費化と同質化に対する宗教の批判的対決の可能性に基づいており、そして、すべての解読のあり方を〈消費的解読〉の下で一元化する今日の大学制度の問題性への指摘と本質的に関連するのである。グリッフィス氏はこの問題意識に基づいて〈宗教的解読〉を〈宗教的告白〉(信仰告白)をもたらす解読のあり方として定義し、そして、この解読のあり方の制度的、教育的、認識論的な意味追求を展開するのである。つまり、〈宗教的解読〉と〈消費的解読〉との本質的対立の制度的、教育的、認識論的な意味追求が、本書の中心課題であると考えられる。

第一章である「Religion」(宗教)は宗教を一種の〈告白〉(account)<sup>④</sup>として規定した上で宗教的告白の特色及びそれを形づくる〈解読〉のあり方を問題にする。宗教は一種の報告、

もしくは一種の告白として定義することは諸宗教の実質的内容から抽象化された形式的な(Formal)<sup>⑤</sup>規定のあり方であり、そして、その形而上学的な自身(神は存在するか、しないか。諸行は無常であるか、ないか等)を問題にしない意味では現象的な(Phenomenal)<sup>⑥</sup>規定のあり方となるように考えられる。グリッフィス氏は宗教に対する以上のような定義に基づいて〈宗教的告白〉特有の性格として次の三点を挙げるのである。つまり、(一)包括性(comprehensiveness)<sup>⑦</sup>(二)のり越え不可性(unsurpassability)<sup>⑧</sup>(三)中心性(centrality)<sup>⑨</sup>の三つである。グリッフィス氏によればこの三点によって成立している〈宗教的告白〉というものは、人間の自然的、内在的なものとしてあるのではなく、必然的にある特定の社会的、言語的、制度的なコンテクストによって学ばれた能力である<sup>⑩</sup>。宗教的告白の能力は教育によって身に付けられたものとして了解されるならば、〈宗教的解読〉との関係の必然性とは自明のものとなるように考えられる。

第二章「Religion And Literary Work」(宗教と文学的作品)は、文学作品の構成と保存の問題に対する考察を、文化・科学技術との関連から着手している。その中で、文字文化を文学作品・科学技術及び歴史的記憶の成立の不可欠の条件とする思想傾向が厳しい批判の対象となっている。グリッフィス氏はその傾向の最も代表的なものとして十八世紀のGibbonの「Decline And Fall Of The Roman Empire」<sup>⑪</sup>を取り上げ、この思想傾向と貨幣経済との関係に対して厳しい分析を展開する。そして、

文字文化がまだ成立していない、もしくは中心的な役割を果たしていないにもかかわらず、質の高い文学作品が構成され、保存されている具体的な一例として、古代インドの文化を問題にする<sup>⑧</sup>。グリッフィス氏によれば、暗記や記憶術を前提とするこの文化のあり方は〈宗教的解説〉と深い関連性をもち、〈宗教的解説〉の成立にふさわしいものとして評価される。グリッフィス氏は、また、この主張に基づいて、〈宗教的解説〉と〈消費的解説〉との違いを論じ、ラテン語の *hermeneutic*<sup>⑨</sup> の解釈に対する興味深い指摘を展開するのである。グリッフィス氏にしてみれば、〈宗教的解説〉と記憶術との間に深い関係が存在しており、宗教的読者にとつては、宗教的文獻そのものに本質的な価値が認められている点において〈消費的解説〉との区別が認められる。結論的にいえば、〈宗教的解説〉における文学作品とは、その構成や保存に関してはいかなる技術体系からも独立しており、そして、思想や語りによる構成のあり方、記憶術による保存のあり方と最も深い関連にあると考えてよい。つまり、作品そのものよりも構成や保存の技術を重視する〈消費的解説〉に対して、〈宗教的解説〉では文学作品そのものが重視されているということである。

第三章「The Context Of Religious Reading」(〈宗教的解説〉のコンテキスト)は、〈宗教的解説〉と〈消費的解説〉との対立の制度的、教育的、認識論的な側面の分析に関して最も大切なところである。この分析は、また、〈宗教的解説〉と現代の諸課題との関連に関しても最も重要なものである。〈宗教

的解説〉は人間の自然的、内在的なものではなく、ある教育的なコンテキストの中で学ばれた能力であるとするならば、〈宗教的解説〉を伝承し、教える制度の存在が必然的に問題になるように考えられる。この制度の最も代表的なものとしてチベットの西洋の中世における〈修道院〉が挙げられるが、現代の教育制度(特に大学)における〈宗教的解説〉の伝承は極めて困難なものであるように考えられる。この問題に対するグリッフィス氏の分析はその制度的側面と認識論的な側面を中心としているのである。この二つの側面の間に深い関連性が存在することも明らかである。制度的な側面に関していえば、グリッフィス氏は〈宗教的解説〉の制度的特徴として〈権威〉(authority)・〈階級性〉(hierarchy)・〈共同体〉(community)と〈伝統〉(tradition)を取り上げる。制度的分析は〈権威〉の問題を中心に展開されているが、グリッフィス氏が述べているように個人の主観を根拠としている〈権威〉の排斥とは、近代の教育制度の根本理念をなすものである。その意味では、〈権威〉の存在を前提としている〈宗教的解説〉と近代の大学理念との間に本質的な矛盾があるように考えられる。もちろん、グリッフィス氏が指摘するように近現代の大学においても暗黙の内に〈権威〉が存在するが故に、その存在を表明化し、明示することが重要である。この矛盾を克服することが極めて困難であるが、問題の本質を明らかにするためにその認識論的側面に触れる必要があるように考えられる。グリッフィス氏はこの問題の認識論的側面を internalism (認識の根拠を主観の

内に置く認識論的立場」と externalism (認識の根拠を主観に外在しているものとして了解する認識論的立場)との対立として展開している。<sup>①⑦</sup>つまり、近現代の大学制度の理念とは内在主義に基づいているのに対して、〈宗教的解読〉は外在主義によって根拠付けられているということである。この課題の正しい決着のために、この二つの認識論的立場との論理的対決が必要であるように考えられるが、グリッフィス氏の展開は一定の指摘にとどまっている。その代わりにポスト・モダン諸思想によってもたらされた内在主義の敗退による大学制度における〈宗教的解読〉回復の可能性を指摘している。<sup>①⑧</sup>つまり、グリッフィス氏によれば、ポスト・モダン諸思想と外在主義に根拠付けられた〈宗教的解読〉との間に一定の類似性が認められるのである。<sup>①⑨</sup>

#### 第四章 「The Fundamental Genres Of Religious Reading」

〈宗教的解読の根本的な様式〉は注釈 (commentary) と文集 (anthology) を中心にして〈宗教的解読〉の諸様式を分析するものである。この分析には文学批判や文献の諸様式に対するグリッフィス氏の知識の広さと深さに驚かされるものがある。けれども、本章の中心は注釈と文集の定義にあると考えてよい。グリッフィス氏によれば、注釈の性格は次の三点によって充分に要約することが出来る。その一つは、別の文献との本質的連関である。つまり、すべての注釈は何らかの作品や文献の注釈である。その意味ではすべての注釈は一種のメタ作品であるということである。もう一つは、注釈されている文献の様相は、

質的に、または量的に支配的である。そして、最後に、注釈されている文献は注釈の構造及びそれを形づける資料の順番を決定するのである。<sup>②①</sup>この三つの特徴のある文献のすべては注釈であると考えてよい。文集の定義として、グリッフィス氏はすべての言葉が別の作品 (もしくは諸作品) に由来している文献、そして、なんらかの形で諸作品の境界線を決定するあり方をしている作品のすべてが文集であると規定している。<sup>②②</sup>

#### 第五章 「Commentary And Anthology In Buddhist India」

(インド仏教における注釈と文集) はこれまで解説された諸前提をインド仏教の研究に適用したものである。その内容はインド仏教における教育制度のあり方 (暗記、記憶術、口伝、講義等) の分析から Nalanda と Vikramasīla におけるその具体的なあり方を想定して、その意味を問題にするものである。<sup>②③</sup>次に、Sūtrasamuccaya や Śikṣasamuccaya のような文集と、Triṅśikāḥaṣya や Sarāṅga のような注釈を問題にし、それらの作品の宗教的な意味を論じる。そして、それらの作品とは宗教的解読者によって作られ、宗教的解読者のためのものであったことを結論付ける。<sup>②④</sup>つまり、インドの仏教者は本質的に宗教的解読者であったが故に、それらの作品を〈消費的解読〉を前提にして読まれるならばその意味が必然的に誤解されるのである。

最終章 「Commentary And Anthology In Roman Africa」 (ローマ・アフリカにおける注釈と文集) は、ローマ・アフリカにおけるキリスト教的〈宗教的解読〉の制度を問題にする。

そして、それに基づいて「Testimoniorum Libri tres ad Quirinum, Speculum de Scriptura Sacra, Adversus Marcionem, Liberiv in Ioannis Epistulam Ad Parthos, Tractatus」のような文献を分析する。キリスト教の伝統に対して乏しい知識しか持てない私にとってはそれらの分析を評価することは不可能に近いが、分析から出てくる結論に対しては本質的に共感できる。つまり、一部の例外者の存在が認められるとしても、ローマ・アフリカにおける宗教的作品とは〈宗教的解読者〉のために〈宗教的解読者〉によって作成されたものであったということである。

グリッフィス氏は以上のような論点を「Conclusion」（結論）において次のようにまとめる。今日の社会におけるグローバル化が〈宗教的解読〉（及び宗教的解読者）の存在を無意味なものとし、その絶滅をもたらししている。けれども、〈宗教的解読〉に対して色々な批判が存在するにもかかわらず、それらの批判が決定的な意味を持つているとは考えられない。その代わりに、〈宗教的解読〉というものには本質的な価値が認められるが故に、現代社会におけるその保存と発展の可能性を問題にする必要がある。そして、この可能性を実質化し、具体化する二つの道が存在すると指摘する。その一つは、寺院や教会のような宗教的な制度における回復の努力であり、もう一つは大学制度の改革における〈宗教的解読〉確立の可能性である。

以上のように本書の中身を記述した上で、その評価の問題に

入っておこう。宗教哲学の立場に立脚しているグリッフィス氏と仏教学を立場としている私との間に本質的な違いが認められる。それ故、まず最初に、私の研究における問題意識と方法論を明らかにする必要があるように考えられる。私の研究における問題意識に関しては、現代の諸思想との対決において仏教特有の論理性と倫理性を明確にし、現代社会において仏教を一つの理論領域として独立させることが中心課題となっている。私にしてみれば、仏教以外の思想に基づいて仏教を明らかにすることは本質的に不可能であるが、現代社会において仏教を一つの理論領域として独立させるためには現代諸思想との対決は不可欠の条件となるように考えられる。私は、現在、〈現代思想〉という名の下で問題にされている諸思想に対して深い不信感を覚えているし、それらの思想に対して想像し得る以上に厳しい対決を展開しなければならぬと考えている。私はこれまで深く信頼していたハーバーマスの思想に関しても同じような不信感を覚えつつあるが、少なくとも現代思想のその他の代表者とは違って、ハーバーマスの思想は私にとって重要な思想課題を残している。その意味では、今日の私はハーバーマスの政治的発言及びそれを支えている思想の論理的内容の両方に関して本質的な不信感を覚えているが、本論文においてはハーバーマスの思想的論点に対して論じたいと考えているのである。

近代の〈主観中心的な理性〉の克服のあり方に関するハーバーマスとポストモダン諸思想との間の論争は私の思想の重要な出発点の一つになっている。(私が後述するように、この

テーマはグリッフィス氏が指摘する「internalism（内在主義）」と「externalism（外在主義）」との認識論的対立と深く連関している（つまり、理性そのものを否定し、近代を抑圧的なものとして全面的に断罪しているポスト・モダン諸思想に対して、ハーバースは「社会的近代」（今日における資本のグローバル化のような無方向的な経済発展のあり方）と「文化的近代」（科学・道徳・美術等におけるそれぞれの文化領域特有の価値判断の独立）を明確に区別し<sup>⑤</sup>、そして、「対話的理性」に根拠付けられた「文化的近代」に基づいた「主観中心的な理性」と「社会的近代」の克服の可能性を主張しているのである。今日の私はハーバースの「対話的理性」に対して深い疑念を覚えるようになったが、「文化的近代」と「社会的近代」の区別に基づいたポスト・モダン諸思想への批判を今でも支持している。そして、このテーマは私にとってももう一つの思想課題、つまり、「文化的近代」における宗教の位置の問題と深く連関している。良く知られているようにそれぞれの理論領域特有の価値判断の独立によって成立した「文化的近代」というものは、前近代社会における宗教的、有機的な社会の崩壊によって形成されたものである。その意味では、宗教が前近代社会におけるその意味と役割を本質的に失っているが故に、「文化的近代」に対する一つの理論領域としての独立の可能性ということは、現代に残された宗教の課題となるように考えられる。私は宗教と「文化的近代」を同質化する発想には反対しているが、前近代社会における宗教の役割の回復の可能性に対して夢を見ることが全

く無意味であると考えている。その意味では、現代諸思想との対決において仏教の「規範的内容」をはっきりさせることによって、「文化的近代」における諸領域の独立とよく類似した形での一理論領域としての仏教を独立させることが私の中心的な問題意識である。仏教学における私の方法論である「批判仏教学」というものはこの問題意識に基づいて成立し、そして、「宗学的方法論」（教学的方法論）と近代の「実証主義的、文獻学的方法論」への批判として展開しているのである<sup>⑥</sup>。

以上のような解説によってグリッフィス氏と私との基本的な立場の違いが了解されるであろう。資本のグローバル化がもたらす価値観の同質化と一元化に対して「宗教的解説」特有の意味を問題にしているグリッフィス氏の姿勢は共感を呼ぶものであるが、「宗教的解説」と「消費的解説」を二者択一的に対立させる図式は「宗教的解説」以外の解説のあり方のすべてを「消費的解説」として断罪してしまう大きな危険性を持っている。私にしてみれば、真の意味での思想的、論理的な対立は二者択一的な性格を必然的に持っていると考えているが、グリッフィス氏が問題にするような「宗教的解説」と「消費的解説」との対立は思想的、論理的な意味での二者択一性を内容としているとは考えられない。「社会的近代」にはすべての文学作品を消費化する傾向が存在するにもかかわらず、「文化的近代」の理念によって生み出された文学作品の多くは「消費的解説」と無縁のものであるばかりか、それに対する痛烈な批判として形成されているといつてよい。その具体例として、ペルトル

ト・プレヒトやアントニン・アルトウの演劇を挙げることが出来る。それらの作品はその意図と内容の両面において〈社会的近代〉と鋭く対立するものであるが故に、〈消費的解読〉として片付けられない性質を持つているのである。その意味では、近代の問題のすべてを〈社会的近代〉の次元において理解しているように見えるグリッフィス氏は〈文化的近代〉に対して無理解であるような印象を私に与える。つまり、〈文化的近代〉との批判的対決において現代における宗教の意味を問題にしている私とは違って、グリッフィス氏は完全な反近代主義者である印象を私に与える。この問題は、また、〈宗教的解読〉と〈消費的解読〉の制度的、教育的、認識論的な違いと深く連関している。この課題は、また、宗教的諸伝統に内在している問題性と、それらの伝統と近代の理念との関係に関する諸問題の両方を含んでいる。〈宗教的解読〉の制度的側面の中心問題は〈権威〉の容認にあると考えてよい。近代の主観中心的な理性に基づいた大学制度は〈権威〉を排斥したつもりでいるにもかかわらず、その存在は暗黙のうちに容認されていることが確かである。今日の大学制度における〈権威〉の存在を明示化し、その問題性をはっきりさせる必要があるという点に関してグリッフィス氏の主張は全く正しいものであると考えられる。けれども、そうだからといって、宗教における〈権威〉を無制限に認めてもよいかといえば、そうではないと言わざるをえない。グリッフィス氏は宗教諸制度における〈権威〉の内部制限を問題にしているが、宗教的な〈権威〉の本質を十分に論じていな

い感じを私に与える。教義の正しさやその解釈の問題に関する正統な意味での宗教的な権威の存在が認められるが、この問題は教団の社会通念やイデオロギーと明確に区別すべきものであるように考えられる。けれども、グリッフィス氏の論じ方ではこの区別はほとんど明確にされていないと考ええてよい。袴谷憲昭氏の表現にしたがって言えば、この問題は〈正当性〉(Legitimacy)と〈正統性〉(Orthodoxy)との区別を通して問題にすべきものであるように考えられる。つまり、〈正当性〉というものは教団の制度やイデオロギーとして容認されているものであることに対して、〈正統性〉の問題は教義の正しい理解を問題にする知性や論理の問題である。袴谷氏が明確に論じているように〈正当性〉と〈正統性〉との対立は宗教的伝統に内在している問題であるが故に、それに基づいて宗教的伝統特有の批判性を確立することが充分に可能であると考えられる。つまり、近代の主観中心的な理性に基づいた批判性と宗教的伝統における〈権威〉を対比するよりも、宗教的伝統特有の批判性を確立することによって正統な意味での宗教的な〈権威〉の意味をはっきりさせ、その不当な使用を厳しく制限することの方が大切である。グリッフィス氏は前近代における宗教のあり方に逆戻りをしようとしているように考えられないが、宗教的伝統における〈権威〉の性格を充分に論じているとは考えられない。私にしてみれば、宗教的な〈権威〉の本質に関するグリッフィス氏のこうした論じ方のあいまいさは〈文化的近代〉との対決において宗教の現代的な位置を問題にする観点の欠落

に由来しているように考えられる。この問題は〈宗教的解説〉と〈消費的解説〉との対立の制度的側面の議論に限定されたものではなく、その認識論的側面に対する議論の中からも出て来る。グリッフィス氏における認識論の議論は、内在主義と外在主義との対立及び両者とポスト・モダン諸思想との関連を中心とするものである。内在主義と外在主義を対比することによって認識論を論じる思想傾向は、最近の英米哲学の中から生まれた新しい発想であるとされている。私は論理実証主義や批判的合理主義のような英米の知的伝統と極めて縁の遠い人間であるが故に、その意味を十分に理解し論じることが、私にとって不可能に近いものである。けれども、この対立の本質を極めて常識的な形で、認識の根拠を主観の内に置くべきなのか、もしくは主観の外に置くべきものかという形で了解されるならば、私は明らかに外在主義の側を支持し、内在主義に対して反対する立場に立脚している。問題は、外在主義そのものには色々な方向が存在しているはずなので、私は必ずしもグリッフィス氏の了解する外在主義を支持しているのではない。グリッフィス氏は人間の意識に外在しているはずの様々な物理学の法則を例に出して外在主義を論じているが、この論じ方には説得力がほとんど感じられない。なぜならば、物理学における認識の根拠は主観に外在しているものであるとしても、ある特定の科学研究によって物理学に対する正しい認識を得ることは、私の所屬している共同体における物理学的な常識を容認することと全く異質なものである。認識の根拠が主観に外在している

ことは、認識の真偽をあいまいにさせ、明確な根拠のある認識と、共同体の通念との違いをあいまいにさせる理由にはならないと考えられる。仏教の伝統から一例を出すと、私の言葉は私の意識に外在するものであり、仏教における唯一の正統な宗教的権威である。けれども、私の教法は私の意識に外在しているとしても、その真偽を批判的に考える必然性がなくなるとは考えられない。仏教において法を正しく分別するアビダルマや論理学派の思想がその必然性から生まれていると考えてよい。仏教における論理学派は仏の教法を正しさの根拠とし、認識の手段を現量と比量に限定することによって証言 (samyak) を認識の手段としては退けた理由はそれである。その意味では、グリッフィス氏における外在主義の論じ方では、認識の根拠の外在性と認識における真偽の区別のあり方との関係が十分に明確にされているとは考えられない。この問題は、また、〈宗教的解説〉の認識論的な根拠としての外在主義とポスト・モダン諸思想との関係の問題と深く関連している。グリッフィス氏にはポスト・モダン諸思想に対する一定の批判が認められるが、全体としてポスト・モダン諸思想に対して共感を覚えているように見える。私は別なところでポスト・モダンの思想傾向に対して自分の批判を展開しようと考えているので、本論文においてはこの問題を詳しく論じないことにする。けれども、ポスト・モダンの思想傾向に対するグリッフィス氏の共感は、内在主義を解体する性格に由来しているように見える。つまり、外在主義に根拠付けられた〈宗教的解説〉とポスト・モダンの思想



的傾向とは、近代の大学制度の認識論的な根拠である内在主義（または、主観中心的な理性）を解体する共通の性格を持つているところから生じた共感であるように考えられる。その意味では、私はグリッフィス氏のこうした傾向に対して本質的な共感を覚えられない。内在主義的な認識論や主観中心的な理性の克服の根拠は、ポストモダン的な思想傾向と明確に対決できるとする外在主義の批判的なあり方に求めるべきであると考えているのである。

結論的に言えば、今日における資本のグローバル化に対する〈宗教的解説〉回復の可能性を指摘している点において本書は高い評価を受けるべきだと考えられる。けれども、前近代における〈宗教的解説〉のあり方と、今日の大学において回復すべき〈宗教的解説〉のあり方との本質的な違いをあいまいにしている点において本質的な欠陥が認められる。グリッフィス氏は現代社会における宗教的伝統の多様性を十分に認めているし、また、今日の大学制度に〈宗教的解説〉の回復を可能にする知的公開性の存在を認めている点において、前近代社会への回復を主張しているとは考えられない<sup>⑤</sup>。けれども、前近代における〈宗教的解説〉のあり方と今日の大学における〈宗教的解説〉の新しいあり方の可能性との区別をあいまいにしていることは明らかである。宗教的伝統における〈権威〉の問題のとらえ方の不十分さや認識論的分析の不徹底さはこのあいまいさに由来していると考えてよい。既成の宗教教団における〈権威〉の内容は、信仰の正統な知性的内容と教団の通念を混同させる強い

傾向と深く結ばれているだけではなく、戦争や差別を肯定する諸教団のイデオロギー性と本質的に連関しているように見えるから最も慎重にすべき問題であると考えられる。認識論の問題に關していえば、グリッフィス氏が内在主義と外在主義との区別から出発していることは全く正しい仕方であるが、その展開のあり方は極めて抽象的な次元にとどまっている。この認識論的区別を〈宗教的解説〉における真理主張の分析まで実質化していない印象を私に強く与える。全体として、〈正統性〉と〈正当性〉との明確な区別に基づいた宗教特有の批判性に立脚した既成教団の通念とイデオロギーへの批判の観点が本質的に欠落しているように見える。この批判のあり方が資本のグローバル化の暴力性と対決しうる〈宗教的解説〉の成立条件であると考えるが故に、本書に対して高い評価を与えつつも、その主張のあいまいさと抽象性に対して本質的な不満を覚えているというのが正直なところである。

〈資本とは衆生の流転の構造だ〉と断言した一人の浄土真宗の僧侶が存在した。私はこの言葉を耳にとどめて生きたいと考えている。

#### 註

- ① Paul J. Griffiths, RELIGIOUS READING—The Place Of Reading In The Practice Of Religion (以下「READING」を略す), Oxford University Press, 1999
- ② 「READING」, Preface を参照。
- ③ 同。

- ④ 「READING」 p. 3-7°
- ⑤ 同。
- ⑥ 同。
- ⑦ 同右° p. 7-9.
- ⑧ 同右° p. 9-10.
- ⑨ 同右° p. 10-13.
- ⑩ 同右° p. 13.
- ⑪ 同右° p. 30.
- ⑫ 同右° p. 30, p. 40.
- ⑬ 同右° p. 43.
- ⑭ 同右° p. 58.
- ⑮ 同右° p. 63.
- ⑯ 同右° p. 63, p. 64.
- ⑰ 同右° p. 72-76.
- ⑱ 同右° p. 74, p. 75.
- ⑲ 同。
- ⑳ 同右° p. 80-97.
- ㉑ 同右° p. 97-104.
- ㉒ 同右° p. 114-124.
- ㉓ 同右° p. 129-147.
- ㉔ 同右° p. 147.
- ㉕ 同右° p. 164-180.
- ㉖ 同右° p. 181.
- ㉗ 同右° p. 182-185.
- ㉘ 同右° p. 187, p. 188.
- ㉙ ヲの翻譯「トラス」 Jergen Habermas, THE PHILOSOPHICAL DISCOURSE OF MODERNITY, The Mit Press, 1987 を参照。
- ㉚ 同右° p. 1-22.
- ㉛ 「天皇制仏教批判」三一書房、一九九八年、p. 32-40 を参照。
- ㉜ この問題について、袴谷憲昭「顕密体制論と正当異端の問題」『法然と明恵』大蔵出版、一九九八年、三二二頁、三三〇頁を参照。
- ㉝ ヲの問題「トラス」 Paul J. Griffiths, THE LIMITS OF CRITICISM, Jamie Hubbard & Paul L. Swanson, PRUNING THE BODHI TREE—The Storm Over Critical Buddhism, University Of Hawaii Press, 1997, p. 155, p. 156 を参照。
- ㉞ この問題に「トラス」著者の「一種深信の思想的な意味に「トラス」著導における如来藏思想批判」『同朋大学仏教文化研究所紀要』第十六号、一九九七年、三五六頁、三八三頁を参照。
- ㉟ 「READING」 p. 183.
- ㊱ 同右° p. 188.